

## 常磐松文庫蔵『鷺流狂言伝書』 一六四点

竹 本 幹 夫

本学常磐松文庫蔵『鷺流狂言伝書』のうち『狂言記』27冊を紹介し、あわせてその内容の一部を翻刻する。

本書は笹野堅氏旧蔵本であり、現状は前記『狂言記』の他、「役別狂言セリフ」5包み114点、「狂言謡」3冊、「間の本」14冊、『狂言アシライ森田流笛ノ譜』『唐音』『鷺狂記』『狂言位付』『書上語り小舞・書上之他狂言小舞』『狂言授答  
アシライ間名寄』各一冊からなる。笹野氏ご自身により、『文学』昭和十八年十月号に「能狂言の本文」と題する論考に「野中本」として紹介され、その後長らく所在不明となっていた（橋本朝生氏御示教）。なお笹野氏紹介の野中本の内、『小舞集』一冊については、本学の狂言伝書中には現存せず、『鷺流小舞集』と題して法政大学能楽研究所に現蔵される。

本書を野中本と称するのは、笹野氏の命名による。すなわち野中本の一部である「間の本」のうちに、半紙にその伝来を記した文書が添附されており、それに「野中儀衛門」書写の由を言うことによる。この半紙は現存しないので、『文学』誌上に笹野氏が引用されたものを以下に抄出した（句読点・濁点を私意で補った）。

是は散楽能の間の詞業を抄せる本也。協能式拾九品老冊は家翁の写させ玉ひたれど、式番目拾五番老冊、三番目三拾

番巻冊、四番目三拾貳番巻冊、五六番目三拾六番巻冊、都合四冊は、我叔父なる杉田吉次郎信義ぬしの写されたる也。抑此書五冊は寛政年間に出来しもの歟。我家文化十一年甲戌の九月八日の祝融に失せ果ぬべきを、其よりさき、今の野中儀衛門の写し取らん迪其宅へ持ていかれたるを此冊（そふ）の命也ける。（中略）かゝる事に思ひ出て、又足らざるを補ふに、貳番目の修羅式拾六番巻冊、三四番目三拾六番巻冊、都合貳冊を足して通計七巻とし、装訂表紙をも自ら製して家の什物となすものは、我後たらん人此道すかぬ人とても、親祖父はかゝる道をさへたどりきとしのばば、武家の式楽たる所以をもしらめとのすさみ也けり。

嘉永三年庚戌 氷室ひらきてあくる日

小十人松前三郎兵衛組 吉見儀助（花押）

笹野氏はまた本書『狂言記』の本文注記にも、「野中儀左衛門」の控えである由を言うとされるが、そうした注記は管見に入らない。ただ「役別狂言セリフ」の包み紙の裏打ちの反古に、

平塚平兵衛・岩崎良右衛門・森田金吾・渡辺小右衛門・伊東伝八郎・服部市左衛門・水野一郎右衛門・若林栄助・太田祐助・出口鍊三郎・青山弥惣右衛門・野中儀右衛門

の名が見えるから、「野中儀右衛門」が正しいのであろう。すでに笹野氏のご指摘のように、この伝書が観世座付の狂言で鷺宗家の仁右衛門家には甥筋の別家にあたる、鷺伝右衛門派の狂言詞章であることは、本文中に伝右衛門所伝の記事がしばしば見えるなどのことから明らかであり、野中が伝右衛門の弟子筋であったろうことも確実視される。もっとも野中儀右衛門と本書との関係は、たとえ『狂言記』の記事に野中の「控え」を含んでいたとしても、笹野説のように野中の写本とは考えがたいように思われる。前記「間の本」の付属文書を文字通り解釈すれば、野中が一時的に借覧した吉見家伝来本をもとに、吉見儀助が増補したものであるという事になり、野中は本来無関係ということになろう。むしろ本書は吉見本と呼ばねばなるまい。しかもこの記事に見える間狂言本と本書の「間の本」とは、「脇能間」の曲目数が一致することを

例外として冊数・冊順・曲目数が異なり、儀助本を原態とすれば、本書「間の本」はその改装残欠本であろう。(7冊二〇四番に対し14冊一三九番が現存)。「間の本」の題記と筆跡とは何種類かが混在しており、しかも原本の冊順・曲順を踏襲せずに改装した形跡が明白であるが、その多くは『狂言記』の筆跡と共通する。あるいはこの半紙は「間の本」の一部の冊に本来付属していたもので、本書の全体と関連するものではないのかも知れない。前述の反古の文字の類のいくつかによれば、「花子へ女」、嘉永四亥年五月九日家元ニ而吉見相手」「水汲みへ住寺」、安政四丑年七月弓町にて」「入間川へ向、安政五年十二月十一日彦根公にて」(いずれも「役別狂言セリフ」△印包紙)などのごとく、嘉永・安政年間前後に井伊家などの諸藩の能や観世大夫家の稽古能などに出演している記事が見え、これらが本書成立の時期を示唆しているようである。とくにはじめの例は、本書の全体が吉見儀助の編である可能性を否定するものといえよう。筆者は江戸在住の末流の玄人の類でもあったのであろうか。なお後考にまちたい。

鷺流伝右衛門派の狂言台本の主たるものには、享保保教本・宝暦名女川本がある。これらに対し本書は最も成立が遅れるものの、それらに匹敵する大部な内容で、他のいかなる狂言台本にも見えない珍曲を含めて右二本とは重複しない独自の曲をいくつか収めてもいる。しかもその多くは上演を前提とする演出注記を伴った記述であり、玄人の稽古用台本であったことが明らかである。江戸後期の伝右衛門派狂言詞章の動向を知る上できわめて貴重といつてよからう。

『狂言記』書誌

(狂言台本) 27冊

117×167<sup>mm</sup>。共表紙仮綴横本。料紙楮紙。本伝書の各冊の大半が同型・同装・同料紙。表紙中央に題記と巻序、背小口にも巻序を記す。欠巻があり、第一―十、十二―二十一、二十三、二十九、三十一、三十三―六の27冊が現存。各冊第1丁に目録(同筆)、右下に「中」字黒丸印あり。原則として各冊5曲を収め、各曲は9―10行書。多くの曲に型付・衣装付等の演出注記や、異文の類を追記する。本文と同筆の付箋や書込み等も多い。曲ごとに改丁。全文はぼ一筆。

【内容】(狂言記一)末広狩・宝の槌・隠レ笠・鎧・福の神。墨付69丁。(狂言記二)麻生・三本柱・目近米骨・張章魚・煎じ物。墨付60丁。(狂言記三)大般若△右之通宝曆二壬申年十一月名女川辰三郎ト談相極▽・大般若・惣八・骨皮・小傘・飛越。墨付71丁。(狂言記四)靱猿・墨塗・雁盗人・秀句傘・文角力。墨付72丁。(狂言記五)鼻取角力・蚊相撲・粟田口・入間川・萩大名。墨付88丁。(狂言記六)鷄鴛・八幡前・水掛婿・舟渡婿△内題渡雀▽・音曲婿。墨付67丁。(狂言記七)庖丁婿・岡大夫・二人袴・引敷婿・賽之目婿。墨付57丁。(狂言記八)布施無経・名取川・地藏舞・腹立ズ・金津。墨付67丁。(狂言記九)小傘・大般若・薩摩守・水汲新発意・啼尼△鹿野忠兵衛口伝・仁右衛門方ヒトリ言▽。墨付61丁。(狂言記十)路蓮△別筆か▽・骨草・宗論・花折新発意・飛越。墨付69丁。(狂言記十二)花見座頭・花見座頭・不聞座頭・不聞座頭△別筆か▽・川上座頭・井礪・鞠座頭。墨付84丁。(狂言記拾三)伊文字・法師が母△鹿野忠兵衛・大笑先生ノ名見ユ▽・千切木・箕被・髭櫓。墨付58丁。(狂言記十四)鎌腹・伯母が酒・釣針・内沙汰・吃。墨付61丁。(狂言記十五)業平餅・金藤左衛門・児流鎗馬・因幡堂・鬼継子・鬼のまゝこ。墨付59丁。(狂言記十六)祝詞神楽△是ヘ本ヲ写候まゝ▽・祝詞神楽△嘉永四亥年シテ相動候節改▽・鈍太郎△別筆か▽・太鼓負△付、祇園祭礼番付▽・比丘貞△別筆か▽・右流左止。墨付83丁。(狂言記十七)朝比奈・節分△元文三年三月廿三日松平大隅守殿御老中招請ノとき二日目伝右衛門之節分▽・八尾・首引・半銭。墨付56丁。(狂言記十八)清水・神鳴・ぬけがら・公事罪人△付、鯉の滝登・蓬萊山・西行桜▽・鬼争。墨付86丁。(狂言記十九)蛸・蟬・榮螺・通門・榮阿弥。墨付35丁。(狂言記二十)昆沙門連歌・蛭子昆沙門・大黒連歌・恵比須大黒・鉢叩。墨付44丁。(狂言記二十一)唐人子宝・唐人子宝△別筆か▽・唐角力・膏藥煉・替座頭・鍋ハツ鉢。墨付59丁。(狂言記二十三)三王・胸突・醉辛・土筆・米市。墨付59丁。(狂言記二十九)筑紫奥・勝栗・三人夫・寝代・臍山人。墨付61丁。(狂言記卅一)人馬・鬼瓦・今参・二人大名・懷中婿。墨付40丁。(狂言記卅三)いろは・しびり・あかづり・舟船・お冷し。墨付31丁。(狂言記卅四)若市・塗師・遊善・春朔・長刀会釈。墨付40丁。(狂言記三拾五)茶殿座頭△内題、茶唄座頭▽・伯養・魚談儀・無言行・重喜。墨付37丁。(狂言記卅六)鷄猫・紺屋吃・禁野・雁礫・帰替盃△内題、帰寶菜▽。墨付39丁。

〔凡 例〕

一、驚流狂言伝書のうち『狂言記』所収曲より、享保保教本・宝暦名女川本のいずれにも未収の十二曲を選び、翻刻する。曲目選定に際し、田口和夫氏『天理善本叢書・驚流狂言伝書』解題の驚流曲目一覧表を参照した。

一、十二曲は次のごとく、五十音順で配列してある。

懐中婿・隠レ笠・金藤左衛門・鶏猫・紺屋吃・重喜・児流鎗馬・仁王・祝詞神楽・臍山人・箕被・無言行。

一、右のうち、〈祝詞神楽〉については、「是ハ本ヲ写候まゝ」と注記のある分と「嘉永四年亥月、シテ相勤候節改」とある分との二種の詞章が存在する。

一、翻刻にあたっては、句読点・濁点を補い、各役ごとにセリフを「」で括り、適宜改行して段落を設けた。

一、型付等の類は改行二字下げで示し、役名や謡い方法記の類は6ボ活字で所定の箇所に示した。

一、文字遣いは新字体を原則とし、「ムる」「ぢ」などは「ござる」「より」と書き下した。ただし、「妹」「哥」「罵」「升る」など、原本の字形をそのまま用いた場合も少なくない。

一、曲名見出しの下に（一ノ三）などとして巻序と曲順とを示した。その他校訂者注記の類はすべて（ ）で囲み、又異文と認めうる墨減部は「」内に示した。

一、不備・脱漏の点は御寛恕のうえ、ご教示賜わればさいわいである。

懐 中 髻 （三十一ノ五）

鶴むこ同断、教手ノ方へ行。

ヲシエテ「先其方の舅の方へ居たならば定て引手物などが出るであらふが、夫を何にても懐中すれば能よ。」シ「扱ハ左様にいたせバ能御座るか。」ヲ「中々。則是を懐中髻と言よ。」シ「夫ならばこう参りまする。」

常の通り分れる。ヲシエテ大コ座へ行。シテ舅の方へ行。案内有。太郎立、いろ／＼言。何レも同断。正身のはな髻一人と云て舞台へ通り、常之通り言と、盃出し、舅吞デシテへ差。扱々からい御酒と云テ、又一ツ吞で、おごうが青梅を、いふ。舅へ盃をさす。

舅「ヤイ太郎くわじや、最前用意した物を出せ。」太郎「畏て御座る。」

三方の上へ弓のつるはづしたるをのせて、太郎持出、シテの前へ置。シテ取て橋がよりへ持て行、弓を懐より下へたてに入ル。扱下ニ居ると胸より出るゆへ、又出し、袖口より通し、両方へ手を広げて出ル。其内に舅、太郎を便におこす事、二度。三度目にシテ出、元の座へ直ルと、舅の盃をシテへさす。右の手にて吞んとスル。吞れぬゆへ下ニ置吞。又舅へ盃を差。舅扣へた程に舞をまへといふ。是より引敷髻、又ハ二人袴の通り、下ニて舞、同断。夫ヨリ舅と連舞になる。三段の仕舞の処にて、舅へ右の手をやつと出て出すと、

ト跡へ引。又左りの手ニて、

ト出ス。夫より早くスル。

「是はめいくな。ア、ゆるいてて被<sup>(着)</sup>下い」。――

棒しバリののごとくにて、舅入。太郎跡より。其跡ヘヲシエテ入。

舅。素袍。段のし目。扇。小サ刀。

教手段のし目。上下。小サ刀。扇。

作り物 弓一張、但しつるをはづして。

隱レ笠(一ノ三)

宝の槌同断。アド主出テ太郎ニ云付、扱都へのほり  
売手ニ出合、段々宝の槌の通り。

「是が宝で御座るか。」中々。「是を宝と申ニ其子細が御座るか。」いわれこそ御座れ、昔シ鎮西八郎為朝といふ大力の有た。我朝につゞく力が無と有つて鬼が嶋へ渡らせられ、鬼と力くらべを被成、其時の契約にハ、鬼が勝でも有る成バ為朝を取つてぶくせうぞ、又為朝のおかちやつた成バ宝菜のしま成隠レ簑に隠レ笠、打出の小槌、此三ツの宝を取て帰朝召れうとかたう契約を召る。何がうでおしすね

をし首ひき、色々の勝負ニもことごとく為朝のおかちやつたに依て、約束のごとく三ツの宝を取て帰朝被成て御座る。簑と槌とハたいてん致ス。其隠レ笠斗りハ都のてうほうニと有て残シ置れたを、直も能バ放シもせうかとの申事で御座る。」「委細承り届ケまして御座る。とても事の事に眼のまへにきどくの有宝をと被仰て御座るが、奇特が御座るか。」「中々きどくこそ御座れ、夫を着れば人の目に見へぬ奇特でおりやる。」「夫ハ調法な物で御座る。それ成ハこなた着させられい。私の是で見ませう。」「夫ニ付ていよく調法な事が有。夫ハ主を思ふ宝じやニ依て其主が着れば見へぬ、又よの者がぎれば見ゆる。早そなたへ売つた物じやニよつてそなたが着れば見へぬよ。」「夫ハ調法ニ御座る。誰が着ても見へぬ事成れば宝でハ御座りませぬ。」「其通りじや。」「夫成バ私の着ませう程に、此方夫で見て被下い。」「心得た。」

ト太郎ハ下ニ居テかぶる。

「何と見へませぬか。」「どれどこにおりやる。」「是く  
是に居まする」

ト云テはなへゆびさす。

「声ハすれどもかつて見へぬよ。」

笠ヲ取ながら、

「扱もく不思議な事で御座る。求ませうが代物ハ如何程で御座る。」「二万足でおりやる。」

是より又宝の槌の通り。太郎歸りてシテ柱ノきわへ置

で。

主立、常の通り。

「汝ハ初て都へ登り、見れバ古笠を求てきた。是をバ置て宝を見せい。」

トなげ出る。太郎いたゞき、

「南無宝／＼、是が宝で御座る。」「夫を宝といふにハ子細が有か。」「中々いわれこそ御座れ。」

ト売手の通り言。

簑と槌とハたいてん致す。此隠レ笠ハ都の調法にと有て残し置れたを、私の口調法を以てまんまと求て参つて御座る。」「夫ハでかいた。扱眼の前にきどくの有宝をといふたが奇特が有か。」「中々きどくこそ御座れ、是を着れば人の目に見へませぬ。」「夫成バ汝着て見い。某の是で見う。」

「夫ニ付いよ／＼調法な事が御座る。是ハ主思ふ宝で御座るニ依て、其主が着れば見へませぬ。是ハ此方ので御座るに依て、こなたの着させらるれば見へませぬ、余の者が着れば見へます。」「是ハ尤じや。夫成バ某が着よう程に汝ハ夫で見てくれい。」「畏て御座る。」

ト云テ主ハ笠ヲ着る。太郎見テ橋が／＼りへのき、

是ハ如何な事どこもかしこもミナ見ゆる。何とした物で有う。」「やい／＼太郎くわじや、早う見てくれい。何と見へぬか。」「どれに御座るやら見へませぬ。」「何じや見へぬ。がてんのゆかぬ事じや。」

ト笠ヲ取テ、

やい／＼兎角見共が見ねバ気が済ぬ。汝着て見い。」「こなたニハお聞分のわるい事を被仰る。是ハ主おもう宝で御座るニ仍て、余の者が着れば見へます。」「是ハ尤じや。夫成バ汝に取する程に着て見い。」「申、か様のけつかふな御宝物をいたゞきましてはいかゞニ御座り升る程に、最はや仕舞ませう。」「是ミ平ニ汝に取する。着て見い。」「さいぜんも申通り私の戴まして誰が持せて置ませうぞ。早仕舞ませう。」「いや何といふても某が見ねバ気が済ぬ程ニ、平に着て見い。」「此様な御宝ハいりませぬ。」「

ト笠ヲなげ出ス。

「おのれハにくいやつ。入うと入まいと汝に取する程に早う着て見い。」「夫成バ是非に及びませぬ。着て御目にかけませう。」「

ト云テ笠ヲ着て、

「夫ミどこもかしこもミナ見ゆるハ。」「先御待被成ませい。紐をしめませぬ。」「夫ミミナ見ゆる。」「

太郎笠ヲ取テ、

「はてがてんの行ぬ事で御座る。槌ニ見へぬはづで御座るが。」「何の見へぬはづといふ事が有物か。」「申ミ、思ひ出て御座る。是に着やうが御座る。」「何とするぞ。」「

太郎笠ヲ両手ニ持、かぶり下ニ居る。

「是でハ見へ升まい。」「

主扇ヲ打ながら、

「是ミこゝが見ゆる。」「

ト太郎ノ袖ヲ打。太郎ハ打所へ笠ヲやりて、

「いや見へ升まい。」是々こゝが見ゆる。「見へます舞。」

ト段々早く扇ニテ打て、

「おのれハにくいやつ。あのおうちやく者、やる舞ぞく。」

主 翁付ハ素袍のしめ、小サ刀。常ハ段のしめ、長

上下。

シテ 嶋物。狂言上下。腰帶。

売手 主同断。

作り物 菅笠。但シ笠当共一ツ。

### 金 藤 左 衛 門 (十五ノ二)

「是ハ此傍りの者で御座る。此間ハ打つゞき仕合わるい。今日ハ罷出仕合をいたそうと存る。惣じて山立のあひさつの詞が御座る。能物をこへ松といふ、わるい物を瘦松と申。今日もこえ松の仕合を致そふと存る。則爰元が人里も遠し、除場も能程に、是に待う。」

「童ハ此山のふもとに住者で御座る。山のあなたに親里を持て御座るが、久敷見舞ませぬ程に、けふハ見舞うと思ひ升る。山道とハ云ながらいつも通ひつけた道で御座るに依て、人も連ずわらハ老人出て御座る。此度もゆると慰うで帰らふと思ひまする。」

「やい／＼そこへ行女、おのれハどこへ行者じや。」どこへ行ふともわごりよハかまいそ。「其袋を置いて行け。」

「なふおそろしい事をいふ者じや。あたりに誰も人へないかなふ。」「ヤイ／＼何をかしましい事を云おる。是袋さへ置いて行バ命ハ助けて取らせう。」「是ハ童が手道具で御座る程に、進る事ハ成升まい。」「夫成バ命ともに取つてのけう。」「夫成バ進上。」「命をも取うと思へども、助てやる程に早うどちへ成ともうせおれ。」「命さへ助て被下るゝ成バ爰許にいる事でハ御座らぬ。」「夫成バ早うどちへ成とも行ケ。まだそこに居おるか／＼。」

女、橋がよりへにげる。

此内に何が有ぞ知らぬ。

ト小袖ヲ取出シ、

是ハけつかふな小袖じや。女どもが上着をほしがつた程に、先是を土産にいたそう。扱も／＼見事な鏡が有。女共の鏡ハ錢のまはり程ないに依て、大きな鏡をほしがつた。是をも女共に取らせう。まだ何か有ぞ知らぬ。かもじが有。是ハ女共が猶々重宝じや。某の女房ハ髪が十筋斗り成らでハない。是をやつたらバ能らふ。紅ざら迄有。幸の事じや。女共が口びるハ青いに依て常々見るしいと思ふたに、此紅を付させたらバ定てしほらしう成う。」

詞ノ内、女橋がよりよりぬき足ニ而出、長刀ヲ取。

「やいお男、能童がだい事の手道具を、能取うと思ふたな。おのれたつた一打にしてやらふ。夫を返すまいか／＼。」

「やい、おのれハ其長刀をなぜに取た。こちへおこせ。」「にくい事をいゝおる。早う手道具を返せ。かへさずハお

のれ切ころいてのけう。」「おのれ女だてらだいたんな事をいふ。しかと長刀をおこすまいか。」

トにぎり小ぶしニテかゝる。

「まだ其つれな事を云おる。己れ其手を打落いてのけう。」ト急にかゝる。

「ヤイ／＼あぶない事をしおる。」「おのれがさいた刀をおこせ。」「女だてらに刀を何にするぞ。」「早うおこせ。おこす舞か。」「ヲ、やるぞ／＼、そりや。」「其袋もおこせ。」「サア／＼是も進すぞ。」「童をなぶつたがよいか是がよいか、おのれがもと首を切はなさねばならぬ。」「ア、かなしや命をバ助てくれい。」「何じや命を助い。」「中々。」「夫成バ助て取せう程に童がのく方を見るな。」「中々見る事でハない。」

ト云テふして居る。女、道具を袋ニ入ル。

「見るな。」「いや見ハ致さぬ。」「まだ見おるか。」「ア、見ハいたさぬ。」「最早能のき時分じや。早うのこう。」

シテ、ソツト起テ、

(九文字分疊減)

「是ハ如何な事つよい女哉。」「いつせきを取らた。」すでに命迄取りやうとした。乍去あまの命をひらふて御座る。此様な時ハ急いでのいたがよい。

ト除ク。笠ヲ見テ、

いや是に笠をわすれてうせた。せめて是成共着てゆこふ。」ト笠ヲ持テ入也。

又追込ニモスル時、女、道具仕廻テ持、長刀ニのせ

んト云テ追込。

## 鶏 猫 (三十六ノ一)

アド「是は河野某<sup>かふの</sup>で御座る。此中某が秘蔵のねこが見へぬ。何者ぞとらへ置たるか、又はころいて有か、にくい事にて有程に急度せんさく申付ふと存ル。」

ト云テ常之通り二人ヲ呼出ス。

二人「御前に。」「汝等を呼出事、別の事でもなひ。猫が今まで戻らぬ。定てとらへておきおつたか、又ハころいて有か、去込ハにくい事にて有程に、所々在々迄も高札を上げ、其上に念を入れて、ねこのありかを訴人致におゐてハ褒美<sup>は</sup>を望次第たるべきと、急度相触候へ。」ト「畏て御座る。

地頭脇座ニ着ク。

次郎くわじや。」二郎「何事ぞ。」「いかさま此猫ハころいて有か、今日迄歸らぬハにくい事でハ有ぞ。」「されバ／＼、御てうあいの猫<sup>被成る</sup>じやによつてお腹立も御尤じや。」「太「そなたハ高札の書付さしませ。某は在々迄触うぞ。」「心得た。身どもハ札の事を云付う程に、そなたハ念を入れてふれさしませ。」

太郎くわじやハ太刀をしながらふれる。

「皆々承り候へ。地頭殿の御秘蔵の猫が見へぬに依て高札を上させられた。此猫のありかを訴人致におゐてハ御褒美ハ望たるべしとの御事なり。又隠し置におゐてハ一類曲事と被仰出て有。其分心得候へ／＼。」

トふれて座ニ下ニ居。子出テ名乗。

シテ「是本町に住居致者で御さる。私が親が地頭殿の猫とも存ぜざろいて御座る所に、殊の外御せんさくにて在々所々へ高札が上つて御座る。今ハ一門の者共泣かなしめども帰らざる事で御座る。天命のがれぬ身のうへの事で御座れば、他より訴人いたし一類迷惑に及ぶハひとつじやうじや。余りに難義さのまゝに私の存るハ、他より訴人いたさぬ先に親の訴人に私が出うと存る。道行誠に親の訴人に子が出るとある事ハためし少ひ事なれども、余り身の置所のなさのまゝで御座る。」

参る程に是じや。物申、案内もう。」太「何者やら案内と有。案内とハ誰ぞ。」「高札の表に付て猫の訴人に参つて御座る。此由仰上られて被下い。」「其申申上うずる程に、しばらく夫にまち候へ。」「畏て御座る。」

太郎其通り地頭えいふ。

主「某じきに子細を聞うずる程ニ是へ通し候へ。」「畏つて御座る。」

じきに聞かせられうずると被仰るゝ程に、こふく通らしませ。」「畏て御座る。」

ト云テ地頭と向ひ合、ワキ正面ノ方ニ居ル。

「猫の訴人といふハ汝か。真直ニ申せ。褒美ハ望ミ次第に取らするぞ。」「畏て御座る。御猫をころしたる者ハ、本町の其者の名をいふ何の何某と申者がころいて御座る。私訴人に出、人の命を取る事ハ十悪のとが人と心に存じながら、

私も一るひ多い者で御座れば、御せいどふの恐ろしさに背中に腹ハかへらぬと存じて訴人に罷出て御座る。」「近頃寄特ニ訴人に出て有。其者をも見知り宿をも存じて有か。」「中々、やどをも存じ其者をも存じて居まする。」「左有バ取ニ人を遣そう程に、汝案内じや致、連来り候へ。」「畏て御座る。」

「ヤイく汝等、あの者を案内者にて科人を召とつて来れ。又猫の様跡をも能見て来り候へ。」「畏て御座る。」

子にいふ。

左有バ案内をさしませ。」「心得ました。」

直ニ一返廻りて。橋がよりへ行ても吉。

「わごりよハ果報な者じや。過分に褒美をとらしませうぞ。」「身共ハ褒美の望も御座なひが、隠し置たらば一門のとがめが恐ろしさに訴人に出テ御座る。」「心得て有ル。」

ト云テ楽屋へ入テ縄を掛けて連て出ル。其内子ハ橋懸りに待。地頭の前ニ連て出、親、地頭とむかひ合、ワキ正面ノ方ニ下ニ置ク。

太「召捕て参て御座る。又猫の様子を見申て御座る。いかにも殿様の御猫をころいて御座る。」

「汝ハ何とて某が秘蔵の猫をころひて有ぞ。」「存も寄らぬ事、私ハ御猫をころしハ致ませぬ。」主「慥に訴人が有が左様に偽るか。」「たとひ訴人御座ります共、御猫に置てハゆめく存じませぬ。」「左様にあらそふならバ訴人を引合ふずるが、夫にても真直に申まじいか。」「いか様に被

仰付るゝと御座りましても存ぜぬ事を申上う様も御座らぬ。願わくハ其訴人と有者を引合せられて被下ませい。」

「扱もくおのれめハ重々の科人じや。」

左有バ訴人に引合せ候へ。」太「畏つて御座る。訴の者急で出候へ。」

子出テ親と地頭と向ひ合テ居ル其真中ニ、正面向下ニ居ル。

主「則此者が訴人に出てあるが、夫にてもあらそひ申か。」扱ハ此者が訴人仕て御座るか。

思ひ入有。

何を隠しませうぞ、私がころいて御座りまする。」「夫ハ何故ころひて有ぞ。」「私の秘藏の鶏を取くらいまして御座るに依て、殿様の御猫とも存ぜざころいて御座る。此事人の存る事でハ御座りませぬ。

ヤイ汝も能聞ケよ。最早親の訴人に汝が出うとハ思はんんだ。このごとくに親をつみにしづめて御褒美に預り、幾万年の栄花をせうと思ふぞ。返つて其心ざしを不便におもふ。

誠に子故に私こそ咎におこなわれまするに、親の身なれば此上ながらも子を不便に存升る程に、此者を必らず助けさせられて被下ませい。」主「汝がいふに不及、子ハ忠節の者なれば如何程も褒美を取らせうぞ、汝は死罪に申付る程に左様心得い。」「私が儀ハ覚悟の前で御座り升る。子が命ハ助かりますとの御意を承りまして、弥あんど仕りま

して御座る。」

「いかに汝等、科人を急せいはいせうず、又子は何にても褒美を望候へ叶へてとらせうぞ。」シ「左様に御座らば御褒美にハ親の命を給り候へ。」是ハ思ひの外の事を申。

訴人に褒美を取せうといふも咎人の命をとらん為にて有間、此訴詔ハ叶ふまじい。何にも余の訴詔を申候へ。」「余の訴詔とてハ何も御座ない。先御心しづめて聞し召され候へ。子の身として親の訴人に出ルとあるハためしすくない事に思召れうずが、他より訴人仕ルにおゐてハ一類罪科におこなわせられ升ると有に依て、私訴人に罷出、御褒美に親の命を申請ふと存て、扱こそ子の身として親の訴人に出て御座る。御制札にも御褒美ハ望次第とかゝせられて御座る程に、御制札の通り是非とも御褒美に親の命を被下ませい。」主「夫ハ無理の望にこそあれ。よく合点を致候へ、他より訴人致て有におゐてハ親子諸とも成敗にいふれども、汝訴人致て有ニより汝が命を助け、其上に褒美を取するが、ひがことにて有か。」「扱はしかと御免るしある間敷いにて候か。」「中々ゆるす事ハ成らぬ事にて有ぞとよ。」シ「御褒美ハ望次第とかゝせられたる御制札もいたづらに成上ハ、是非なき事にて候。地頭殿の御望のごとく、私が命を御取り候へ。」

ト云テつかく」と出テ、親の前にどうとなをる。

「昔より科人の命こそとれ、善人の命取ためしハ無ぞとよ。」シ「御褒美にハ親の命を乞へどもかなわぬ上ハ、重

ての御褒美の望にハ親子諸共御成ばい有て給ハリ候へ。」  
其時地頭立テ少シ先出テいふ。

「扱もくははきたひのためしかな。昔より申ごとく、

物の哀れを知らざるハ木石のごとしといふ。如何に汝等、

色にていふ

(六字分ゴマ点省略) しかも今年ハ我が親の、十三年に当りたれば、

咎ありとても助るぞ、」

(五字分ゴマ点省略) 親子二人「夫ハ誠か」主「中々に、」

親子立うとふ「有がたの御慈悲や、く、とがをバゆるしおわ  
します、なさけの程ぞありがたき、く。」

親「なふ御料ハ子でハなふて命の親じや。こちへわた  
らします。」

ト云テ子をおふてはいる。

△昔様にハ、私の祖父がねこを殺したると、孫訴人ニ出  
ル。

△殊更ことしハ我親の、十三年に当りたれば、親孝行  
の為といふことわりといふ、とが有逆もたすけ舟の、

ハ有難の御事や、く、慈悲有との御なさけ、天に  
もあがるこゝちして、子の何某を肩ニかけ、帰るぞ  
嬉しかりける、く。

地頭のしめ。素袍。大臣あぼし。小サ刀。

シテ子・太郎・次郎、三人とも

縞の物、或ハのしめ。狂言上下。腰帶。

太郎くわじや、太刀持出ル。但シ外ニ一人太刀

持出テもよし。

親出立 縞の物ニてもものしめニても。すぎ素袍。狂言袴。

こし帯。

## 紺屋 吃 (三十六ノ二)

シテ「是ハ此他りの者で御座る。某の頼ふだ人ハ大果報  
人で御座る。追付目出度事が有ている程に、小袖上下を用  
意せいと被仰付て御座る。小袖ハ次郎くわじやが承りて御  
座るが、某ハ御上下を請取つて御座る程に、急いで紺屋へ  
参つて申付ふと存る。先急いで参らふ。」

道行の言葉如何様ニもいふ。

参る程に是じや。物申、ていしゆおりやるか。」アド「表  
に物申と有。案内とハ誰ぞ。是ハどれから御座りました。」

シ「こ、く、此他りの者じやが、そちハて、く、亭主か。」

アド「な、く、中く、て、く、亭主で御座る。」

「こ、く、是ハにくいやつで御座る。身共がも、く、物  
いふ真似を致す。」

ア「こ、く、是ハいかな事。あれハ身共が物をろくにゑ  
いわぬと知つてなぶると見へて御座る。」

シテ「ヤ、ヤイそこな者。」ナ、ナ、なんで御座る。」シ

「な、く、なんどくハ、なぜに身共のま、く、真似をする  
ぞ。」ア「いやこ、く、此方ハなぜにミ、く、身共の真似  
をしてなぶらせらるゝぞ。」シテ「ヲ、く、おのれが真似  
をしなから其つれな事をいふか。」

段々いゝつり、次第ニ埒明ず吃、後にハつかミ合

時、目代出、両ハ分けて子細をとふ。いよく埒明



ア「ヤイ／＼／＼／＼何とした事じゃ。」

シテ驚いてアトへ下り、

シ「まつびら御ゆるされい。」ア「おのれハそそふなやつじゃ。どこにか月代をそるといふて師匠につまづくといふ事が有物でおりやるぞ。」シ「面目も御座りませぬ。」

ア「そちハ知るまいが、惣じて七尺さつて師のかげをさへふまぬといふ事がおりやる。以後を急度おたしなミやれ。」シ「はア。」

ト云テアドの後ろへ行、南無三宝といふて跡へ帰り、ア「何としたぞ。」シ「いやすでに此方の陰をふまふと致て御座る。」ア笑テ「さて／＼そちハ愚どんなやつじゃ。今いふたハ世のたとへといふ物じゃ。苦敷ない。早うそつて呉い。」シ「いやどう御座つても此方の陰をふみそふで成ませぬ。私の致し様が御座る。ちとまたせられい。」

ト後見座へ行、竹の先へ剃刀を付て持て出。

ア「夫ハ何とした事じゃ。」シ「されバ其事で御座る。

七尺さつて師の陰をふまずと申升るに依て、夫故加様に致升る。」ア「夫ハ尤でおりやるが殊の外あぶのふおりやる。苦敷無事じや程に是へよつてそらしませ。」シ「いや御氣遣ひ被成升るな。少もあぶない事ハ御座りませぬ。」ア「夫成バあぶのふない様に随分念を入れてそらしませ。」シ「心得て御座る。」

シテ語「いで／＼かミを、そらんとて、」地「／＼、師のかげふまんと、いふことあれば、重喜ハ七尺、飛しさり、

剃刀づかを、長々ととりのはし、およびごしにぞ、そつたりける。」アド語「師匠ハ是を、よろこびて、」地「猶／＼それや、よくそれやとて、居ねむりすれバ、」シ「重喜は師匠の、仰にしたがひ、」地「又かミそりを、引寄て、手合しながら、前を後ロ、うしろをまへと、逆剃に、鼻の先をぞ、そつたりける。」

アド「あいた／＼／＼。」

「其時師匠ハ、きもをつぶし、たゞずミければ、忠喜は面目、うしないて、あそこやこゝに、かゞミまわれバ、師匠は重喜を、とらゑんとおつかけ、<sup>（お）</sup>ぼつめけるを、一飛にとんで、門前さして、逃行バ、せんかたなくて、うらめし顔にて、鼻をかゝへ、／＼て、眠藏さしてぞ、入にける。」

シテ小竊か無地のしめ。狂言袴。腰帶。へんてつ。ごうし頭巾。

アド白ねり袷かむじのしめ。衣。けさ。中啓。じゆず。ごうし頭巾の上へ角頭巾ヲかぶり。

腰桶のふた。剃刀。竹の先へ剃刀を付、布にて巻。

児流 鐔馬（十五ノ三）

「是ハ此傍に住居いたす者で御座る。先召使ふ者を呼出して談合致事が御座る。やい／＼太郎くわじや、居るかやい。」ハア。「居たか。」御前に。「一段と早かつた。汝を呼ハ別の事でも。当年ハ加茂の祭りのとうが某じや。身

共ハ何レもと談合する御方がないに依て、そちと談合する。「誠に当年ハ此方の当で御座るニ依て、誰有つて御談合被成るゝ御方も御座りませぬ。」「其通りじや。例年流鏑馬があるが、何レもの所で兎にこまらせらるゝと聞たが、扱此兎ハ何とせう。」「されバ何と致たが能御座らふか。」「汝才覚をして呉い。」「されバ何とか能御座らふか。いや申、思ひ当つた事も御座れ共、申たならバおしかり被成ませう。」「やれ爰な者ハ。しかるも時に依た者じや。何成とも云てくれい。」「夫成バ申ませう。誰かれと申ても俄の事で御座るに依て、私の存升るハ、御かミ様を兎に致いてハ何と御座らふ。」「ヤレ爰な者。只さへわゝしい者が其様な事をいふた成バかミ付で有ふ。」「と申ても先仰られて御覧じられい。」「其儀ならバ身共ハ云事ハ成舞。そちを頼程に云てくれい。」「夫成バ先其通り申て見ませう。」「能様に頼むぞ。」「心得ました。

申、御内ニ御座り升るか。」「童ハを呼ハ何事じや。」「御談合申度事が御座る。是へ御出被成ませい。」「何事じや。」「別の事でも御座りませぬ。明日ハ加茂の祭りで御座る。」「ヲ、あすハ加茂の祭りじや。」「夫ニ付て頼ふだ人の当で御座る。」「夫が何としたぞ。」「去レバ其事で御座る。例年流鏑馬が御座るが兎が御座らぬに依て、此方少しの間兎に成て御出被成ませい。」「ヤレ爰な者。其様な事が童に成物か。」「御尤で御座る。乍去御存の通り頼ふだ人ハ何レも様と中が悪う御座るニ依て、誰有て御談合被成御方も御座り

ませぬ。少の間で御座るニ依て御出被成ませい。」「何と云たりとも童が其躰が成物か。」「先能御聞訊被成て御らふじられませい。此度兎を出しませねバ頼ふだ人の恥で御座る。夫の恥ハ女房の恥で御座る。其うへ御顔の見へ升る事でハ御座らぬ。少の間で御座る程に、何卒御出被成ませい。」「実と汝が云通りこちの人の恥ハ童が恥じや。夫成バ兎も角もせうが、六ヶ敷事でハないか。」「いや別に六ヶ敷事でハ御座りませぬ。私の御側に居て御差図を致ませう。」「夫成バ兎も角もせう。」「然バ明日の事で御座るに依て、そろ／＼御支度を被成い。先あれへ御出被成ませい。」「心得た。」

「申、御座り升るか。」「何事じや。」「其通り申て御座れバ御合点被成て御座る。」「夫ハ近比満足した。」

「何レも御座るか。」「何事で御座る。」「当年ハ加茂の祭りの当ハ誰殿の番で御座るに依て、あれへ参らふ。」「夫が能御座らふ。」「サア／＼御座れ／＼。」「心得ました。」「今日ハ天気も能御座つて一段の仕合でござる。」「其通りで御座る。」「いや何かと申内、早是で御座る。案内をこいませう。」「能御座らふ。」

「物申、案内申。」「表に物申と有。案内とハ誰そ。」「物申。」「物申とハ。」「某でおりやる。」「是ハ何レも様、能こそ御出被成ました。」「其通り云て呉い。」「畏て御座る。」

や申、何レも様の御出被成まして御座る。」「何と皆のわせた。」「中々。」「かう御通り被成いといへ。」「畏て御座る。」

申、かう御通り被成ませい。」「心得た。

先今日ハ御当目出度御座る。」「何レも御揃被成て近比忝ふ御座る。今日ハ天氣も能御座つて一段の仕合で御座る。」「其通りで御座る。」「追付流鏑馬を始ませう。」「能御座らふ。」「やい太郎くわじや、御児を同道せい。」「畏て御座る。さらバかふ御出被成ませい。」「童はいやじや。」「是程に思召立てられて御座る程に、是非共御出被成ませい。御児を同道いたいて御座る。」

「さらバ始ります。御覧じられい。」

「あたり。」「今のハ何とやら合てん参りませぬ。」「いや左様でハ御ざらぬ。しかも星で御座る。」「太郎くわじや、星じやと云か。」「星く。」「さらバ目出度。今一筋遊バします。御覧じられい。」「取わき只今のは地をすりしました様に御ざつたが。」「能あたりました。」「左様で御座る。さらバ目出度御盃を致う。ヤイ太郎くわじや、盃を持て。」「畏て御座る。」

酒盛有。

「扱大事の御児で御座る程にかへしませう。やい太郎冠者、御児を同道せい。」

「いつもあとで御児の顔を見ます事で御座る。少御児の顔を見せさせられい。」「いやは去御寺の大事の児じやと被仰て、顔を見する事ハ成ぬと申されて御座る程に、成升舞。」「実と太郎くわじやが云通りで御座る。」「いやく左様でハ御座らぬ。此前の当の時も、しかも此方の見させ

られたでハ御座らぬか。是非とも見ませう。」「いやくどふ御座つても見する事ハ成ませぬ。」「平に見ませう。

是ハ如何な事、女房で御座る。」「其通りで御座る。」「アノ恥ハどうした物で御座る。扱もくおかしき事で御座る。サアく何レも、御座れく。」「

「ヤイわ男、此様に童に恥をあたゆると云事が有物か。」「某ハ知らぬ。太郎くわじやがした事じや。」「ヤイ太郎くわじや、此様に若者に恥をかくするといふ事がある者か。」「私でハ御座らぬ。頼ふだ人で御座る。ゆるさせられい。」「何の、ゆるすといふ事が有物か。どれへ行ぞ。取らへて呉い。やる舞ぞく。」「

## 二 王 (二十三ノ一)

シテ「是ハ此傍りニ住居致者で御座る。某何共渡世の送り様が御座らぬに依て、他国を致うと存る。夫ニ付、こニ御目被下るゝお方が御座る程ニ、お暇乞ニ参らふと存て罷出た。先急いで参う。誠ニ妻子を振捨て参る様な口おしい事ハ御座らぬ。さりながら命さへ御座らバ、又仕合を致て重ねてあふ事も御座らふ。」

いや参る程に是じや。物申、御案内申。」「表ニ物申と有。案内とハ誰そ。」「物申。」「もの申とハ。エイそなたか。」「中く、私で御座る。」「そなたハ見れバ旅出立じやが、どれへ行し升ぞ。」「其お事で御座る。私も手前がふつと成ませぬにより、他国致し升る。」「是ハはいかな事、身共

ハ又人に頼れて田舎など鳥渡行し升かと思ふた。夫ハに  
 がしい事じや。何とぞ爰許に留置たい事じや。」「扱く忝  
 い御意で御座り升る。常々お目下されます故、其御礼お  
 暇ごひかれこれニ参りました。山の神や悴が事を頼ミ上  
 升る。最早かふ参り升る。」「まづ待しませ。身が所へそ  
 の出入すると云事ハ誰知らぬ者ハ有舞。」「其義皆様の御  
 存で御座る。」「されバそこじや。某迄の外聞じやに依て留  
 置たい物じやが、そなたも知る通り身共も近年ハ手前が成  
 ニ依て合力もならず、気の毒な事じや。」「いや左様ニ御  
 被成るれば迷惑ニ存じ升る。今迄身命をつなぎましたも、  
 皆此方のおかげで御座り升る。其段ハ何方へ参りましたも  
 御恩は忘れハ置ませぬ。忝ふ御座り升る。」「いやお礼迄も  
 おりない。何とぞ分別の有そふな物じやが。なふ能事  
 有。」「いか様な事で御座り升る。」「別の事でも。惣じてそ  
 なたハ物真似が上手じやニ依て、わごりよを仁王ニ拵へ  
 て、当所の上野へ連ていて、今度天よりあらたな作の二王  
 がふらせられた程ニ皆々お参りやれと、よそながらふれた  
 成バ、老若ともニ群集せう。定めてさいせんが有う程ニ、  
 是を取て元手ニしたならバ能らふと思ふが、何と二王に成  
 らしませぬか。」「扱く能御分別で御座る。いか様ニ成と  
 も頼上ます。よからふ様ニ遊ばされて下されい。」「何が  
 扱身共ニまかさしませ。」

最早よい時分じや。いざおりやれ。」「心得ました。し  
 て、何も道具ハいりませぬか。」「いかにも少入物が有が、

身が所ニある。持て行う。少お待ちやれ。」「心得て御座  
 る。」

アド、道具を持て出、

「なふく是ニ能物が有ハ。」「夫ハ嬉しう御座り升る。」  
 「サアくおりやれく。」「参り升るく。」

此様ニ何角と御世話ニ成升る段、御礼の申上ませふ様も  
 御座りませぬ。」「其段ハ少しも苦敷おりない。イヤ来る程  
 ニ上野じや。大かた此傍りがよからふ。拵らへさしませ。」  
 「心得ました。手伝ふて被下い。」「心得た。」

ト云テ肩衣を取テ肌をぬがすると、下ニじゆばんを着  
 て居る。扱頭巾をかぶせばちを持せて、前ニ腰桶ノ蓋  
 を明テ置。尤みの上へかへして置なり。

「何と能御座るか。」「大かたよい。去バ先其躰をして見  
 さしませ。」「心得て御座る。」

ト云テ二王のまねをする。

「なふ其儘の二王じや。」「何と似まして御座るか。」「其儘  
 でおやり。かまへてあらわれぬ様ニさしませ。」「畏て御  
 座る。さいせんを取ました成バ御目ニかけませう。」「夫を  
 待事でおやり。身共はこの様子を触うぞ。」「頼みあげ  
 する。」「心得た。」

是よりシテハ大臣柱の方にて二王の真似をして居ル。

アドハシテ柱ノ方ニテフレル。

ヤアく皆々お聞きやれ。当所の上野へあらたなる作の  
 仁王の天よりふらせられた程ニ、皆々お参り被成いや。」

ト云テ太コ座ニ居。

立衆、橋がゝりにて、

「何れも御座るか。」「是ニ居り升る。」「承われバ当所の上野へ天よりあらたなる作の二王のふらせられたと申程ニ、参つておがミ升まいか。」「誠ニふしぎな事で御座る。参つて拝ませう。」「サアく御座れく。」「心得ました。」「何と思し召ぞ。か様な目出度御代成バこそ、天より二王のふらせられて御座る。何と奇代な事でハ御座らぬか。」「其通りで御座る。」「是ハ早上ので御座る。彼二王ハどこに立て御座るぞ。されバこそ是ニ立せられた。扱く殊勝な事でハ御座らぬか。」「誠ニ是ハ作と見へ升る。」

立頭立衆ともおがむ。

「私ハ立願ニ則脇差をあげませう。」「身共ハ此帶を上ませう。」

又さいせんなど上ル。其外いろく上ル。

「最早下向致ませう。」「夫が能御らふ。」「申、宿へ帰り皆若い衆へ此由を申て、明日ハ大勢連て参りませふ。サアく帰らせられい。」「心得ました。」

ト皆々幕へ入。

「なふく嬉しやく。先是を持て参り、見せませう。定て悦ませらるゝで御座らふ。」

「いや是じや。申、御座り升るか。」「誰でおりやる。」「私で御座る。」「こなたか。して仕合せハ何とおりやる。参りハ有たかの。」「中々、殊の外参詣が御座つて、此様なけつ

こふな物を数多立願ニ上ると申て置いて参りました。」「誠ニさまぐの物が有。夫でそなたハよかるふ程ニ、内へ帰つて内儀ニ見せさしませ。」「尤左様でハ御座り升るが。申、物で御座る。」「何事ぞ。」「参りの衆が帰らるゝ時ニ申され升るハ、此由を皆々へ知らせて明日ハ大勢連て参らふと云れまして御座る程ニ、身共ハ参つて又してやりませう。」「なふそなたハ欲の深い人じや。最早夫で能程ニひらに置しませ。」「いや左様でハ御座りませぬ。皆殊の外殊勝な事じやと申て御座る。早速なわります。私ハ参り升る。」「是々かまへて入ぬ物じや。最早置しませ。身共ハ知らぬぞ。」

ト云テ太コ座ニ居ル。シテハ小廻リスル。

「いや此様ニ毎日く参りが有様な事成バ、某ハ有徳ニ成で御座らふ。いや参る程ニ是じや。かの躰を致う。惣じて仁王ハ、あんの二王うんの仁王と申て御座る。此度ハうんの仁王に成うと存る。」

ト云テ二王の躰をして居ル。

扱是ハ、参詣が遅ひが。」

ト云テ幕ノ方ヲ見て、立衆出ルト、夫を見テ其儘二王の躰ヲスル。

立頭「サアく御座れく。」「参り升るく。」「何と思召ぞ、天より仁王のふらせるといふ事ハ不思議な事でハ御座らぬか。」「仰らるゝ通り、ふしぎな事で御座る。」「はや是で御座る。さらバ拝ませう。」「夫が能御座る。」

ト云テさいせん杯上て、拝ミ、

「いや申、きのふ拝ました時ハあんの二王で御座つたが、今日ハうんの二王に成らせられた。不思議な事でハ御座らぬか。」

ト云と口を明。

又あんの二王に成らせられた。不思議な事じや。」

後の立衆「いや此二王を能く見ますれば誰やらニ似まして御座る。」「誠ニ誰やらに似た様ニ御座る。」「多て此様な事ニハ狐狸のわざが有物で御座る。」「どれく。是ハ二王のおわらやり升る。」「少こそぐりませう。」「

ト云テ皆々左右後ろより、

「くすくすくすくす」

シテハ随分こらへて夫より笑う。

「なふかたりで御座る。」「ア、助けて被下い。」「やれ盗人よく。」「わうちやく者、どれへ行ぞ。取らへて呉い。やる舞ぞ。」「免させられい。」「

下ニじゆばん、上ニ縞物。狂言上下、袴ク、ル。

シ 腰帶。萱笠持。

テ 後、二王ノ時、肩衣取両肌ヌギ、じゆばんを出ス。燕尾頭巾ノ中をク、リ力紙付。トツコニテ

出 モ太鼓のばちニテモ持。

立 前ニ腰桶を置。尤ふたを返シテ置。さんせん箱の心也。

アド 段のしめ。長上下。小サ刀。扇。

立 衆 右同断。

サイセン、女帯・小袋・刀、其外いろく持テ出ル。

(改)「誠ニさまくな物がある。そなたハ夫でよからふ程

ニ、内へ帰つて内儀ニ見せさしませ。」「畏て御座る。先是をバ此方へおあづけ申升る。」「心得ておりやる。是ハおびたゞしいておりやる程ニ、早是で置しませ。」「(改)「左様で御座り升るが。申、物で御座る。」「

(改)アンノ二王 掩

右ノ手ヲ開キ指先ヲ脇腹ノ方ヘ付テ居ルナリ。左リノ手ニトツコヲカヅク様ニ持。是ハ愛宕ノ二王也。山王ノ二王ハトツコヲ横ニ持、正面ノ方ヘ高ク上テ持。

ウンノ二王 運

左リノ手ヲニギリ、手一パイニサシダス。右ノ手ヲ開キ脇腹ノアタリニ、ユビサキヲ横ノ方ニシテ。

是ハ本ヲ写候まゝ(朱書)  
祝 詞 神 樂 (十六ノ一)

シテ「是ハ此傍りに住居致ス神主で御座る。いつも当月ハ誰殿の方へ参り御祈禱に祝詞を致ス。今日ハ参らふと存て罷出た。道行身共の参り御祈禱を致ス旦那衆ハ、御子孫も繁昌なされ、次第く有徳ニならせらるゝに依て、某を仏神の様に思召事で御座る。」

いや参る程に是じや。先案内を乞う。物申、御案内申。」「表に物申と有。案内とハ誰ぞ。」「物申。」「もの申とハ。」「

「私で御座る。」「誰ぞと存じたれば此方で御座るか。能こそ御出被成て御座る。」「今日ハ吉日で御座るに依て御祈禱ニ参りました。」「夫ハ忝ふ御座る。先かふ通らせられい。」「心得て御座る。」

ト云テ舞台ノマンナカより少脇正面ノ方ニ下ニ居ル。

神子「童ハ此傍りに住居する神子でござる。いつも当月ハ誰殿の方へ御神楽に参る。まづ急いで参りませう。道行私ハ旦那方数多持まして御座るが、あなたこなたで御ちそふにあひまする事で御座る。」

いや参る程に是じや。物申、御案内申。」「又表に物申と有。案内とハ誰そ。」「わらハで御座り升る。けふハ最上吉日で御座り升るに依て、御神楽に参りました。」「目出度おりやれ、こちへ通らしませ。」「心得ました。」

ト云舞台へ通る。神主見付、詞を懸ル。又神子より詞を懸ルモヨシ。

シテ「ヤア御出やつたか。」神「中々、御神楽ニ参りました。」「シテ「近頃目出度こそおりやれ。」

さらバ祝詞をはじめ申そふ。」「夫を願まする。」

「抑いざなぎいざなぎの命、天の岩倉の苔むしろの上に、男女夫婦のかたらいをなし、一女三男をもふけ給ふ。一女とハ天照皇太神宮の御事。左有に依て赤きを人間と定め、黒きを牛馬と名付給ふ。一切の衆生を利益せんため、中にも荒神と見へさせ給ふハ、雨の宮に風の宮、北にさいぐう鏡の社、浅間が嶽にハ福一万虚空蔵、惣じて日本六十

余州の大小の神祇、守らせ給へ、謹上再拜く。」「

御子も一所に神楽を始ル。

神子「さらバ御神楽を始め升る。」「一段とよからふ。」「

「お神楽こそ目出たふおわしませ。命長うちうよふのぞいて、」

ト神楽を舞。

シ「ア、かしましい。祝詞にまぎれて成てこそ。気の毒なやつがうせた。脇へのひたがましじや。」「

ト云テ一ノ松カシテ柱か。又幕ギハモヨシ。

「夫当り来る年号ハよき年号、始り初メて白がねの花咲小がねの実なり、万物和合する時をもつて、つゝしもうやまつて申、謹上再拜く。」「

神主いやがり橋がムリへ行と、大臣柱ニテ正面ムイテ、アド「お神楽がかしましいといふて脇へのいた。猶近くと寄ませふ。」

ト云テソコニテ二段目と和哥。

はるか成、沖にも石の見へけるハ、ゑびすのごぜの腰かけの石。

又神楽舞。神子、神主のそばヘヨリテ右ノ如ク舞。神主いやがり、アソココヘ逝テ、再拜くと言テ居ル。神子ハ悦ビテヒタモノ追かけ、アタマノ上ニテ鈴ヲフル。神主弥くいやがり、其内ニ神楽ニ少シノリ、又気がついて、

謹上再拜く、のつとを申てすゞしめ申せば、神ハ納受

し悦び給ふ、きん上さいはい／＼」。

夫より又神楽ニウツリ、舞テシヤギリ留也。

へ千代の御神楽参らすれば、神も嬉しく思し召せ。

へてうよふ災難のぞいて息災延命、所も繁昌末さか

へけり。

神子、神楽を舞時、太コ座へ行、懷中より鈴ヲ出シ、左リノ手ニ末広ヒロゲテ鈴ノ先ヲ押へテ、シテ柱ノ先へ出テ初ノ和哥ヲ言出ス。左右ノ手ヲ開キ、少シ先へ出、又跡へ少引テ、目付柱ノ方へ角取テ、又大臣柱ノ方へ行テ角取テ、左リへ廻リザマニ、シテノツムリノ上ニテ鈴ヲ強クフル。其時シテ神子ノ顔ヲ見テ、橋がムリシテ柱へか行、一ノ松ニ下ニドウトロクニキテ、又祝詞ヲいふ。神子ハシテ立テ行と、其座ニテ小廻リヲシテ、鈴ヲグハラリ／＼ト鳴シテトメテ詞言。又二段目ノ和哥ヲ云。爰ハ大臣柱ノキワ也。扱拍子ヲ踏、左リノ方へ大廻リシテ、シテ柱ノキワへ来テ、小サク小廻リシテ、シテの方ヲ見テ、左右へ乗テ見セル。シテハ神子ノ方ヲ見テ少シジ、移リテハ、又構ハズ祝詞ヲ言。神子ハ鈴ヲ左右へ振合テ、鈴ヲ前へ振り、扇ヲ後へアテ、鈴振テ見セル。シテモ夫ヲ見テ、移リ乗リテ立フトシテハ、又シラス顔ヲシテ下ニ居テ祝詞ヲ云。二三度も乗テ立フトシテ、夫ヨリ立テ神子ノ真似スル。神子、跡ノ方へ左リノ足揚テ、右ノ片足ニテソロ／＼跡ジサリニシテ笛座へ行。シテモ神子ノ通りニシ

テ、シテ柱ノ先へ出ル。互ニ乗テキテ、夫ヨリ入替リ、神子ハシテ柱、シテハ笛座ノ上ニテグハツシ三度シテ、又元ノ座へ入替リ、面々ニ小廻リ、正面向テ鈴ヲ振分ル。両手左リへ出ス時ハ、左リノ片足アゲル。自ハアヲ向テ右ノ方ヲ見ル。又左リノ方へ両手ヲヤル時ハ、右ノ片足上ル。自ハ左リノ方向ク。四五度も如此ニ振分ケテ、夫ヨリ神子先へ立テ、シテ跡ニツキ大廻リシテ、面々ニ小廻リシテ正面向ト、シヤギリ留也。

神楽ノ事、近頃改ル

シテ柱ニテ和哥ヲ揚、正面へ鈴振出ル。跡へサガリ、扱見付柱ノ方へ行、右足引テ又大臣柱ノかたへ行、右ノ通り大廻リニカ、リ、神主ヲ見付テツムリノ上ニテ鈴ヲ強ク振ル。其時シテ御子ノ貞ミテ、立テシテ柱へ行テ下ニキル。御子又シテ柱ノ方へ廻リ行ク。右ノ通り、シテ耳ヲフサギテ一ノ松へ行、下ニキルト、御子ハシテ柱ニテ鈴ヤメテ詞言。ソコニテ式段目ノ和哥ヲいふ。橋ガ、リノ方向テ、左右へ呼出シ、是ヨリ本書同事。

シテ 神主

小縞厚板。狂言袴ク、ル。大臣急ぼし前折。腰帶。幣。

アド 神子 又、布衣ノ出立、浅黄指貫、風折黒也ニテモ。

箔着流シ。白練水衣、帶セズ前ヲ針ニテトデル。  
側繼ノ後ロヲハナシ、前ヲ腰帶ニテシメテヨシ  
又ハ側繼無シニモスル。鈴。かづら。はね元結。末広。

鈴ノ柄ニ総付テモ吉。かづら掛様ハ、耳ヲ出シ  
テ掛ル時ハ鬘帶ヲスル、耳ヲ出サズニカケル時  
ハカヅラ帶ナシニスルモノ也。御子ヲシテニス  
ル時ハ乙ノ面カケル。水衣ハ白シケニテモ。

ティ主 段のし目。長上下。小サ刀。扇。

嘉永四亥年、シテ相動候節改（朱書）

祝詞 神樂（十六ノ二）

「是ハ此傍りに住居いたす神主で御座る。いつも当月は  
誰殿の方え祝詞に参る。則今日ハ参うと存じて罷出た。先  
そりく〜と参う。イヤ身どもの参つて御祈禱いたす旦那  
衆ハ、御子孫も繁昌被成、次第く〜に有徳にならせらるゝ  
に依て、某を仏神の様に思召事で御座る。」

イヤ参る程に是じや。先案内を乞う。物申、御案内申。」  
「いや表に物申と有。案内とハ誰そ。」「物申。」「物申と  
ハ。」「某で御座る。」「此方で御座るか。能こそ御出被成て  
御座る。」「今日ハ吉日で御座るに依て、御祈禱に参つて御  
座る。」「夫ハ忝ふ御座る。先かふ通らせられい。」「心得て  
御座る。」

ト入替り下ニ居テ、

何と御案内ハ替らせらるゝ事も御座らぬか。」「替る事も  
御座らぬ。」「子供衆は皆御息才でおりやるか。」「一段と息

才で御座る。」「そふで御座らふ共。某が御祈禱するに依て  
其筈で御座る。」「誠に此方の御かげじやと申て皆悦びます  
る。」「左らばのつとを始メませう。」「夫を願ひ升る。」「

ト云内、神子出ル。亭主ハ其座ニ居てもよし。又元ノ  
座へ来テモよし。シテハカマハヅ祝詞を初ル。立居ニ  
テ三拝、柏手二ツ。天のもろてむすび、十たからむす  
び、御へいにて左右を払ひ、

「抑々伊弉諾伊弉冊の尊、天の岩倉の苔むしろの上にし  
て男女夫婦のかたらいを成し、一女三男をもうけ給ふ。一  
女とハ天照皇太神宮のおんこと、高天の原に神留り座す皇  
親神漏岐神漏美の命を以て八百万の神等を神集に集賜ひ、  
神議に議り給ひて、吾皇御孫の尊をバ、豊葦原の水穂の国  
を安国と平らけく所知食と、事依し奉りき。如此依し奉り  
し、吐普加身依身多女寒言神尊利根陀見波羅伊玉意喜余目  
出玉ウ、謹上再拜く〜。」「

ト、此内神樂初ル。神子ハ、シテト亭主ト談合スミ、  
夫ヲ願ひ升るトいふ時分出、橋がよりニ而名乗。

「童ハ此傍りに住居する神子で御座る。いつも当月ハ誰  
殿の方へ御神樂に参り升る。先急で参りませう。  
来る程に是じや。」

ト橋がよりより舞台へ案内、

物申、御案内申。」「又表に物申と有。案内とハ誰そ。」「わ  
らハで御座り升る。」「能こそ御出やつた。」「けふハ吉日で  
御座り升るに依て、御神樂に参りました。」「近頃目出度お

りやる。先かう通つていつもの通り御神楽を初メさしませ。」「心得ました。」

ト亭主ハ大小ノ前ニ居ル。神子ハ太コ座ヘ行、懷より鈴を出し、扇ひろげ、鈴ノ先ヲおさへ、シテ柱ノ先ニテ扇ト鈴ヲ一所ニ寄テ居テ、

お神楽こそ目出たうおわしませ、命長<sup>ちやうようぞ</sup>う中殃除<sup>ちやうようぞ</sup>ひて、

ト云ト笛吹出ス。鼓モ神楽初段。和哥ヲ上、両手ヲ左右ヘ高クひらき、正面ヘ出、左右ヘ下テ、振分ケながら跡ヘ下リ。爰ニテ詞かくる。若、詞かゝり様遅クバ、小廻リシテモヨシ。シテハ神楽を少し聞テ、ア、やかましいと云様な顔して、亭主ヲ呼。

「や、申。」

立テ、

「何事で御座る。」「先あの神楽を待てと被仰れい。」「心得て御座る。」

ト神子ノ方ヘ向テ、

いやのふく先其神楽を待しませ。」「心得ました。」

シテ大臣柱ノ方行ながら、

「申、一寸是ヘ御座れ。」「何事で御座る。」「別の事でも御座らぬ。祝詞を上るにあの神楽がまぎれてわるいに依て、やめいと被仰れい。」「心得て御座る。」

いやのふく。奥に神主の御座るが、祝詞を上るにまぎれてわるいに依て、神楽を止いと被仰る。」「尤左様でハ御座りませうが、のつと御神楽は別で御座り升るに依

て、かまわずと祝詞を上させられいと被仰れい。」「心得ておりやる。」

申々、左様申て御座れば、祝詞と御神楽は別で御座るに依て、かまわずと上させられいと申升る。」「かまわずと上い。」「中々。」「かまわずと上いといふ事が有物か。兎角止いと被仰れい。」「其様にも申され升舞。此方ハかまわずと上させられい。」「△」

「此方からして合点が行かぬ。まぎれてわるいに依て止いといふ事じや。扱もくゝにがくしい。」「

ト腹を立々、元の所ヘ来テ、下ニ居テ、又のつとを上ル。▲

△ト亭主ハかまわず神子ノ方ヘ来テ、

「さアく此方ハかまわずと神楽を舞しませ。」「心得ました。」「

ト神子ハ神楽ニカ、ル。☆

シテハ腹ヲ立、下ニ居テ、

▲「謹んで念じ奉る。諸<sup>もろ</sup>の神たちの中にも、あらがミと見へさせ給ふ雨の宮に風の宮、北に斎宮<sup>いみぎ</sup>鏡のやしろ、浅間がだけにハ福一万虚空蔵、惣じて日本六十余州の大小の神祇、守らせ給へ、謹上再拜く。」「

☆神楽二段目と哥

「はるかなる沖にも石の見へけるハ蛙<sup>つゝ</sup>の御前<sup>ごぜん</sup>の腰掛<sup>こかけ</sup>のいし。」「

初段同様、正面ヘ出、手ヲ下ゲ、左右ヘ振分ケ下リ、

「ア、かましい。きのどくなやつがうせた。イヤのいたがましじや。」

「夫当り来る年号ハ能年号、始り初めて白銀の花咲小がねの実なり、万物和合する時を以て、謹しみうやまつて申、きむじやう再拜くくくくくく」。

祝詞を申てすゝしめ申せ、神ハ納受し悦び給ふ。謹上  
再拜くく。」

ニシテ、片足ニテシテ柱ノ方ヘ飛行。シテ同じくシテ  
 笛座ノ上ヘ飛行。互ニ小廻リ。扱左右ヘグハツシ。立  
 テ又前の躰ニテ飛入替リ、元の座ヘ来、互ニ小廻リ。  
 左右ヘぐわつし。乗ながら小廻リ。正面ヘ向ト、鈴ト  
 扇ヲ左リノ方ヘ突出シ、顔ハ右ノ方ヘ向ケ、又鈴・扇  
 ヲ右ノ方ヘ差上、顔ヲ左リノ方ヘ向ながら鈴ヲ振。斯  
 如スル事三度斗リ。シテモ其通リスル。扱扇ヲ後ろヘ  
 あて、鈴ヲ前ヘ出し、神子先に立、大廻リ。シテ跡ニ  
 つき廻ル。神子、笛座ノ上ニテ小廻リ、シテハ仕手柱  
 ノ前ニテ小廻リ、笛ヲ聞合セ、シヤギリ留。  
 シテ、初御幣カツギ出ル。右ヘ。舞台入、亭主ト掛  
 合の内ハ下ヘ置。祝詞ニカ、ル時、先扇ヲぬき両手ニ  
 テ左右ヲはらい、真中ニテいたゞぎ、其儘立テ三拝。  
 扇ヲサシ、柏手ニツ打。

十宝結（印形絵図あり。口絵写真参照。）

夫より御幣ヲ取、いたゞき、左右ヲ払イ、又いたゞきのつと初ル。

(御幣持ち様絵図あり。口絵写真参照。)

右ノ手ニテ柄ヲ持、左リノゆびのはし持そへる斗り。

臍山人 (二十九ノ五)

アド名ノリシテ柱。

「是ハ此傍りの者で御座る。山ひとつあなた迄所用有て

参る。道行別に海道も御座り、しかも是ハ難所なれ共、近道で御座るに依てさい／＼爰を通る事で御座る。」

トハシガ、リヘ掛ル。幕の内よりヨリツレ詞、  
(二字衍)

「きかぬ／＼。」又ツレ「先お待ちやれ。」

ト云ナガラ出ル。アドハキモヲツブシ跡へ巡ル。

「いやきかぬ／＼。」又「是ハ如何な事、先氣をしづめさせませ。」アド「是ハ何事じや。」ツレ「きかぬ／＼。」

ト舞台へ押モドス。

アド「先何事じや。心を静めて訳を言しませ。」ツレ「我御料ハ誰じや。」アド「身共ハ道通りの者じやが、先何事を争ハしますぞ。」ツレ「聞て埒の明ぬ事じや。代ハめを。きかぬ。」アド「夫でハわけがわからぬ。」又「誠にさうあらふ。かうでおりやる。」

我々ハミナ木こりに行者じやが、いつも山へ行て木を取、市へもていてうる者じや所に、同じ渡世を送るものに代ハ、イヤ太郎といふいたづら者があると思しませ。きやつを代ハといふハ、我々ハ人が力があるといふ所で皆代ハ／＼といふ。きやつ近頃ハや／＼もすれバ大酒をのふで、われ／＼がこつて置た薪をやにハに集取て、けふハ先かつた、あすも又かるぞなどいふて、其儘市へもて行をる。けふも又この人達の木を取たに依て、やる舞といふたれば、何レもを打擲せうとした所を留て、是迄連て逃た程に、あのごとく腹をたつ事でおりやる。」

ツレ「身どもハどふあつてもあいつを殺いて了簡がある。

なお構やつそ。」又「なふ無分別な事を言します。宿に妻子もある身でハ無か。先とくと合点させませ。」

アド「夫々身どもが分別つとしてやらふ。」ツレ「扱何とするぞ。」アド「其通りをお坊に成と書てもらふて、地頭殿へ出たならバよからふ。」ツレ「されバそこじや。日頃こそあれ、秋の堤普請、扱ハ冬の夫に行た時分も、又御坊に雇はれても、我等よりもがいぶんはたらくに依て、あなたこなたミなきやつをひかせらるゝよ。」アド「扱／＼夫ハにが／＼しい事じや。」

ア、思ひ出いた。よい事が有。きやつは酒をのむか。ツレミなく「かたのごとくの大酒でおりやる。」アド「力ハつよいの。」ツレミなく「夫ゆへわれ／＼が口おしい事でおりにやる。」アド「身共が思ふハ、沢山に酒をしいて、酔ふた時分仕様がある。」皆く「よへバどうもならふが、醒たならば又意趣を返さるゝであらふ。」アド「氣遣ひさししますな。惣じて人の力の強いも、臍の垢さへ取れバ力が落るといふ。酔ふた時分に臍の垢を取てやらふ。」皆く「是ハ一段と能分別でおりやる。去ながらこゝにハ酒がおりなひに依てなるまい。」アド「扱きやつハ山をおりたかの。」

ツレ「いやいつも爰ならでハ帰る道ハなひ。まだおりハせぬ。」アド「然らバ思ひ立日が吉日じや。誰也とも麓へ行て早う酒を取へおりやれ。今こそあれ、後々はめん／＼の仕合ではないか。」ツレ「たゞハえのむ舞。」アド「されバそこじや。最前物あらそふたわびごとに礼をすと言ての

まいたならバ呑ぬ事ハ有まい。」ツレ「あいつに礼をする事ハいやじや。」アド「むさとした事をおしやる。きやつが力さへぬくれバ、跡でハいか程打擲せうとまゝでハおらないか。」ツレ「是ハなア。」ミナ／＼夫々「一段の事でありやる。」ツレノ末ヨリ「身共が酒を買ふて来ふ。」ツレ「わごりよハ足が早いに依てたのむ。」ツレ末「まかさしませ。」

ト後見座ニナル。

アド「なふきやつが来ても何も言ずに身共に任さしませ。又身どもハ貞を知らぬ程におしへておくりやれ。」皆々「心得ておりやる。」

ト皆々笛座ニナラビ下ニナル。

シテ、鎌腰ニサシ、薪縄ニテ負フテ出ル。

シテ「なぜにおくるゝぞ。又休むか。夫ばかりの木を負ふて。さて／＼役にたゝぬやつらでハある。身どもハ先へゆくぞ。」謡ツヨク「一調空しき谷の声、梢に響く山彦の、無声音をきく便りと成、声にひどかぬ谷もがなと、望しも実かくやらん。」

ツレ見付テ、アドノ袖ヲ引ヲシエル。

ツレ「あれ／＼。きやつで御座る。」アド「心得た。」

立テ腰カバメナガラシテノ前ヘ行。シテハ氣ヅカヌ也。  
アド「お礼申まする。」

シテ見テキモヲツブシ、悪太郎ノ尊丈ノヤウニスル。  
アド「お礼申升る。」

シテフリ向テ、

「跡からハ誰も来ぬものを。」

口伝。

アド「こなたへお礼申升る。」シテ「身共に。」アド「中々。」  
シテ「夫ハ如何様な事で。」アド「先お待なされい。なふ／＼。」

ツレノ方見テ、

こちへおりやれ。」ツレ「何事じや。」

トシテノ貞ミテ腹立ツ。アド叱ル。シテハコ、ロヅカヌスル。口伝。

アド「ジイ／＼。しもに／＼。」

ツレ貞見合セ、フセウ／＼下ニナル。

アド「先其負ハせられた物をおろさせられい。」シテ「この儘でよふおりやる。」アド「いや／＼。」

ト云テシテノ後ヘ廻リ、薪ノ紐ヲトク。シテオロス。

アド脇ヘオク。口伝。

アド「扱／＼おびたゞしうおわせられた。誠にこなたハ天神で御座る。」シテ「身ハこらぬ。ミナ人がこつてくるゝ。」

ツレ「あれ／＼あの様な事をいゝおる。」アド「エヘン／＼。」

扱申上升る。私ハ此山の麓の者で御座るが、最前爰を通り掛りましたれバ、此人ミがこなたといさかいを致いたと申によつて、身共もきゝかねて、ミナ／＼の無礼を詫ませうと存じ、」

ツレ「さうでハおらない。」アド「あへんく。」

お待申ておりました。聞せられうならバゆるいて遣ハされませい。」シテ「扱ミそなたハ奇特な人じや。」アド「ハア引。」シテ「先手をあげさせ。」アド「是がよふ御座る。」

シテ「身共が方にハ子細はおらない。いつもくるゝ薪をくれ舞といふに依て叱た斗じや。」

ツレ「何のくれう。」又「あのつれをいゝます。」アド「あへんく。」

シテ「其方ハ風でも引しましたか。」アド「ちと咳氣に御座る。この後ハ御意を背く舞と申升る。御ゆるされて被下れう成バ難有う存じ升る。」シテ「夫程にいふ成バきゝ届てやらふ。」アド「ハア。難有う存じまする。」

此中後見座よりツレノ末立テ、

「これく酒ハ買ふたが、かのいたづら者めハまだ来ぬか。」アド「あへんく。いや夫ゝ、いたづら者の事をお詫をする所じや。どれく是へおこさせ。」

瓢タントリ、シテノ前へ持出ス。

アド「是がお礼で御座る。」シテ「是ハめいわくな。よふいふておくりやれ。」アド「ハア。」シテ「とても事に大儀ながらあの者どもに、身が内へもてゆけといふておくりやれ。」アド「ア、されバそこで御座る。かれらが申まするハ、お草臥でも御座らふず、爰で沓ツこし召るゝやうにと願ひ升る。」シテ「じや。」アド「中々。」シテ「夫成バ是で開かふ。」

ツレ「近かつへめが。のミたふてこらへらるゝ物か。」アド「あへんく。いか程かつへてもそなた衆にハのませぬぞ。さアく上りませい。」シテ「是ハ慮外じや。」アド「沢山こしめせ。」

酒モリ口伝。アドムリニ沓ツ吞、大方シテニノマスル。アド吞テ小舞。コノム舞あり。クタビル、。

アド「つかれさせられたで御座らふ、お足をさすりませう。」シテ「いやくおかしませ。」アド「殊の外肥させられた。」シテ「いや、そうもない。」アド「いかいお腹で御座る。定てこそばゆう御座らふ。」シテ「さふもおりない。」アド「いかひお臍で御座る。」シテ「何とあるか。是ハ何とする。」大勢押へ付ル内、アドニギリ手ヲ出ス。シテハベタリトスル。

アド「是々大きな臍の垢じや。」

カイデ

くさやくく。」

ト手バライスル。ツレ、ミナく立カ、リ、

「此頃木を取たがよいか、是がよいかく。」

トニギリコブシニテ打擲スル。シテハベタリ、痛イくくと斗リ。ヨツタルテイニテイ。

ツレ「どれく薪をもて行う。」ツレ「夫がよからふ。」

カツゲドモカツゲヌテイ。ミナくキモヲツプシ、  
「扱く強力じや、何とせう。逆も持れまい。よしく此縄で引て行う。」ツレ「夫がよからふ。」

縄ヲトキ、引。

アド「身共ハ此鎌を所得に致さふ。」ツレ「迎もの事に手  
伝うておくりやれ。」アド「心得た。」「ゑいや／＼。」

橋が／＼ヘナラビ縄ヲヒイテユク。シテヤウ／＼立テ、  
シテ「ア、その薪沓把也ともくれさしませ。」ツレ「なん  
の、おのれにやらふぞ。はなしおらふ。」

突コカシ、縄ニ取付。シテ又起上リ、

シテ「これ／＼。」

ト取付。縄キル、。ミナ／＼ヘタル。キモヲツブシ立  
揚リ、

ツレ「是非に及ぬ、かついでゆかふ。」

大勢ニテワヤ／＼ヨロ／＼カツギ入ル。シテノコリ、

「なふ／＼ミなの衆。ア、早いなれた。」

酒は醒る<sup>（マ点省略）</sup>。帰山のくれ、肌<sup>ヘル下</sup>ヘハ寒し臍の風。ヤアたび人

の杖にハ、ヤア／＼、無用の足を助け、大勢<sup>クル</sup>のこぶしには、

自慢<sup>下</sup>の鼻<sup>ヘル下</sup>をひしぎつゝ、帰る姿や山人の、鎌も薪も奪<sup>ヘル下</sup>れて、

行こそなやめ代ハも、足<sup>ヘル</sup>よわぐるまめぐり来て、わがわる  
さとぞさとりける、／＼。<sup>（ヨロ／＼ト膝ヘサガリ）</sup>

一首よふだ。臍の垢とられ力もおちこちのたつきなけれ  
バ帰る柴人。仕なひたる形かな、やれ。」

シテ 縞モノ。金ナシツバツギ。ク、リ袴。コシ帯。

ヒゲ。燕尾頭巾。鎌腰ニサシ、タキギ負フテ出

ル。黒塚の通り。

アド 狂言上下。腰帯。小縞モノ。竹づへツク。

ツレ 縞力腰ガハリカ無地。モギ胴。ク、リ袴。コシ  
帯。三人、四人、九人か。

作り物 ひやうたん。竹づえ。

箕 被（十三ノ4）

シテ「是ハ此傍リニ住居致者で御座る。某不及ながら和  
哥の道に志し、初心講を結んで御座るが、当月ハ某のとう  
に当て御座る。夫ニ付先女共を呼出し談合する事が御座  
る。のふ／＼是の、居さし升か。」「童を呼せらるゝハ何の  
御用で御座る。」「用の事が有程に、先こふ通らしませ。」

女、笛ノ上。シテ、シテ柱。

「扱用の事と被仰るゝハ何の事で御座る。」「別の事でもな  
い。当月ハ某の連哥の当にあつた。押付何れもお出被成  
るゝ程に、其用意を召れい。」「扱も／＼此方ハ、此ならぬ  
身代でけふも連哥あすもれんがのと云て、何事で御座る。  
ちと身代のつゞく様に被成い。」「和御料ハ連がとさへいへ  
バ腹を立。此むぐらの宿へ皆御出被成るゝを嬉敷と思ふ  
て、いぶせき小屋のちりをも取、悦ぶ事を、其様にふき嫌  
にするハ、和哥の道を知らぬ故じや。力をもいれずして雨  
土をうごかし、鬼神ミをも和げ、たけき武士<sup>もの</sup>の心をも慰  
む。其方の様なふつまかな人も成ぬといふ事ハない。道ハ  
近きに有どこれを遠きにもとめ、事安きにあれど是を堅ニ

求むと云事有。哥ニも、植て見よ花のそだたぬ里もなし心がらこそ身はいやしけれと云。うつせばなに事も成。唐土の衡適ハ五十<sup>コウデキ</sup>じにして始て詩を作られたといふ。我朝に住で其心のないハ、水に住蛙にハおとることじや。「いや蛙におとらふとミ、づにおとろうと連哥とさへ聞ば腹が立。いつぞやの当も童が手道具を代となしてよふく調たに、又其様な事をおくせらるゝ。夫程成バ童ニ暇を被下い。」暇がほしくバやりもせうが、昔から哥をよふで徳の有事を語つて聞そう。「其様な事ハ聞たふも御座らぬ。」  
「でも聞しませ。」

兩人共下ニ居テ、

語り昔し小野の小町といふ人、ならびなき哥人にて有しが、其頃天が下大きに日照にて民の早苗も実のらず。君御なげき思召て、諸寺諸山の貴僧高僧に被仰付、大法秘法様々にして御祈禱有りけれ共、更に其印なかりしかば、公卿せんぎ有て、和哥の道にハ鬼神も納受ある習なれば、名哥をよみて龍神をなだめさせたまハ、国土の助けをなし申さんとせんぎあつて、小町をゑらみ出され、神泉苑<sup>シモンエン</sup>にて和哥をよみて龍神に手向奉れと宣旨有れば、其時小町、女の身にていかでか神慮をなだむる程の事有べきとも覺へずと辞し申されけれど、既に宣旨下りけれバ重ねて辞し申に及ず、神泉苑へぞ参られける。君もゐいらん被成んとて神泉苑へ行幸なれば、公卿大臣供奉せさせ給ふ。誠に晴ケ間敷事にてありし。小町ハめのと女の房に硯を持せ、池のみぎわに

立寄、しばらくくこうを礼し、筆を取、さら／＼と書下し詠じ給ふ哥に、ことわりや日の本なればとりもせめ去とてハまた天が下とハ、加様によみ給へバ、さしもくまなき空俄に黒雲おふと見へしが、大雨しやじくを流し、きのふ迄かれにし早苗もたちまち青み渡り、民のうれいもなく、五穀成就し万民悦ぶ事限りなく、目出度御代と成る。其外紀の貫之・能因法師・加茂の長明、何レも名哥をよみて徳義多き事にて有ぞとよ。か様に難有い和哥の道を何のかのといふ。ちとそちも心掛い。今でも徳の多い事じや。」

女立て、

「のふ腹立や、また此方ハ其様な事をいわせらるゝ。是程わらハが嫌う事をすかせらるゝ。兎角やめさせられい。止めさせられねば出ていぬる。置せられい／＼。」  
「あゝらのれハにくいやつ。某が日頃連哥ニ好て農作をおこたるゆへ身代が成らぬといふか。相應の利を弁へぬでハない。貧福ハ自然の物、果報ハ寝てまて。今少シ連哥をも仕習うて宗匠をもするならば、世を渡る便りにも成る。己ハ人の氣に当る差合も知らぬやつじや。先前句に連哥をやめよといふやり句を出す。あげ句に出て行ともいわぬに暇を呉いといふ五文字から合点がゆかぬ。己が様な奴ハ人倫たる者ハ近付まい。元来さきらしいのない某なればこそ今迄そふていたれ、常／＼氣に入ぬやつじやとはらみ句に思ふていた。幸ひの事、早うゆけ。」  
「何の行ぬといふ事が有物か。」

女行を手ニテ留テ、

「のふ／＼先まで。今のハミな当座のいゝずてじや。其方が出よふといふも哥をやめよといふ枕詞じやと合点した。とかく夫婦ハ何事も同意せねば成らぬ。こういふてあさるからハ堪忍しておくりやれ。」何と被仰ても連哥をやめずバ出て行。」

女出て行を、シテ見送りながら言。

「誠に家貧にして親知すくなく、賤きにハ古人うとしと云が、身代ふりよくすれバ二世とかねた女房にさへ見捨らるゝ。貧ハ諸道のさまたげと云が誠じや。」

下ニ居テシテ泣。女立帰りシテ柱ニ立テ居ル。シテ見テ、

のふ／＼そなたハなぜに帰りました。」暇を取にハ男の手前よりちりを結でも取る物じやと申程に、何成とも被下い。」シテ「追出すが印じや。」「そう云ては成ぬ、何ぞ被下い。」「そちが知る通り、何もやらふ物もない。柱成とも抜て行け。」夫と思ひ出た。やる物が有。

後見座より箕を持テ出テ、

是ハ朝夕手馴た物じや。これでも持て行。」女取テ「心得ました。」

箕を両手ニ持て肩へのせて、後ろより頭の見へぬ様に頭へ後ろから当て、橋が／＼行を見て、

シテ「此ごとくなれどもあきもあかれもせぬ中じや。近所へ来たなら必らずよらしませ。」心得ました。」

橋が／＼行を呼かへして、

シ「扱も／＼狂がつたなりでおりやる。のふ／＼先待しませ。」何事で御座る。」「まだやる物が有。戻らしませ。」「心得ました。」

女、笛座の上通る。シテハシテ柱ニ立。

「其方なりに付て風と思ひ付いた。三ヶ月の出るぞおしき名残りかなといふ発句をした。覚へていて親達へおはなしやれ。」扱／＼此方ハまだ其様な事を仰らるゝ。聞とふも御座らぬ。乍去人に哥をよみかけられて返哥をせねば、今度の世にハ口の無虫に生るゝとやら申程に、今の脇を申ませう。」扱／＼これハ珍らしい。何と召れた。」「只今何とて御座りました。」「三日月の出るもおしき名残りかな。」女「秋のかた箕に呉て行らん。」

ト云テ行そふにスルヲ手ニテ留ル。

「先待しませ。夫程の心得ならバ、よふ今迄ハ奥深く包ましました。夫程の心ていならバ、今よりハ余所へ行ずに夫婦農業をいとなみながら連哥をして慰う程ニ、戻らしませ。」「夫ハ誠で御座るか。」「中／＼真実じや。」「夫成バ童も誠に出て行たふハ御座らぬ。そふさへ成バ戻りませふ。」「夫は嬉しい。弥／＼是からハすハ繁昌し、五百八十年もそおふ。」「中／＼、七廻りで御座る。」「一段と目出度。いざ語うて帰らふ。」「能御座らふ。」

シテ「荒／＼目出度や／＼やな、和哥にハ神も納受の、／＼印、則夫婦の中立なり。」

又ハ芦荻の内、ハ浜の真砂ハ、よみつくし尽すとも、

此道ハつきせめや、只持あそべ何事も、難波の恨ミうちかづけ、有し契リニ歸りあふ、事こそ嬉しけれ。

うらミといふ時、女に箕を被せる。シテ、左右ニテ留ル。是もうとふ也。

へかういふてあさるからハ

ト、アサルトハ泣也。但シ人間の泣ニハ非なり。

鳥のアサルハ餌をかける事か。

へ其方が云につれて、つい句ニいふておりやる口くさ

ミを、某が思ふたとハ裏表の違いじや。とかく夫婦ハ何事も同意せねば成ぬ。

へ又語りを抜てもよし。

哥へ断りや日の本なればてりをしつ去とてハまた天が下

とハ

シテ 鳥の物。狂言上下。腰帶。

女 箔。美男。女帯。

又シテ、長上下・小サ刀ニてもよし。

# 無言行 (三十五ノ4)

シテ「愚僧ハ讃岐坊と申、無言の行をおこなふ出家で御座る。某斗でも御座らぬ、今三人此行をおこなふ僧が御座る。少某存寄が御座る程ニ外の衆を呼出し申さふ。

皆の衆、御座るか。

常の通り。

扱かた／＼を呼ハ別の事でもない。内ミ被仰た無言の行

を今日よりなされうとある。某も其内に成ませうと申かわいたれども、能々合点致て見升れば、左様に物のいふたいを某ハ堪忍する事が成ませぬ程に、方々ハ兎も角も愚僧ハゆるいて被下い。惣じて無言の行ハ末とげぬと申程に、某の申にまかせて此行をやめ、何がなしに悪心を起さず、出家を堅固にめさりやるまいか。」アド「扱こなたハ聞へぬ。日頃四人心を合せて後の世もひとつ連と申かわしたに、其様な事が有ものか。どう有ても無言の行を致さねば成ぬ。」「いや其方々衆ハ聞分ケのない人じや。しんじつ無言の行ハじゆつないでハないが、其苦勞な事をして難義をしよふより、酒でもものふで浮世にりんゑせぬが仏じや。去とてハよしにさしませ。」「夫々ふとゞきな、酒をのめ。」「中々。」「中にも五戒の一、おんじゆ戒ハ、仏も深くいましめ給ふ事。兎角何と思召ぞ、此人に言葉をかかわすハ無益御座る。此方はかの行を始ませう。」シテ「扱ハ某のすゝめを不聞、今の行を致んとや。」「中／＼。」「扱／＼頼母敷事じや。思ひ立た事を無にせぬハ御出家の行法じや。某ハそなた衆の行の間ダ、湯茶の給仕成としておませう。」

「夫成頼むぞ。」「心得た。

トアドハ大小ノ前ニ腰かけ、三人共無言の行。シテ、

橋がよりへ行、

扱も心づよく無言の行をする事かな。此三人ハ日頃心安くするに、余り仏の道へ思ひ入たらバ某の酒の相手が有まい。何とぞなぶり落したいものじやが。思ひ出した。

ト云、後見座へ行、茶碗持テ出、三人へ、茶を参れ。

三人とも順々にかぶりふる。

のどがかわかふが。  
などいふ。

いやか。夫成バよし。

又後見座へ行、盃。又扇ヒロゲても。

のふく、皆の衆へ、物いわずと酒を一ツ参るまいか。  
是もいやじや。夜寒ながの。夫成バそれがしハ無言他言もなしにひとり此酒を吞じやまで。

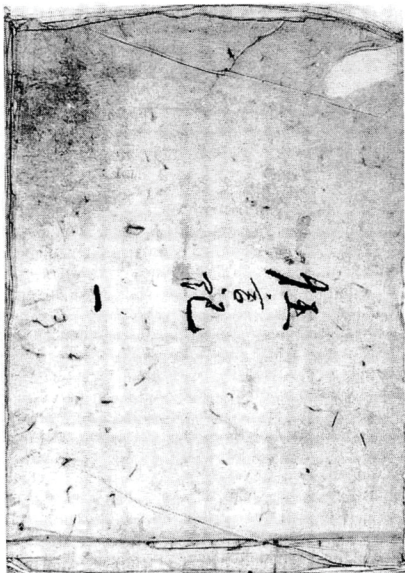
ト爰にて三人の前ニ居、三人を後に置いて小謡などうたひ、しばらく酒吞。

後ろの三人、口明、足ずりなどしてのミたがるてい。後に内一人いまだおちず、外二人をいましめせしするてい。其後三人とも前後も知らず吞たがる。其内一人、ア、吞たい、といふ。アド、夫レ物をいふた。一度にわらい出し、笑の内より、

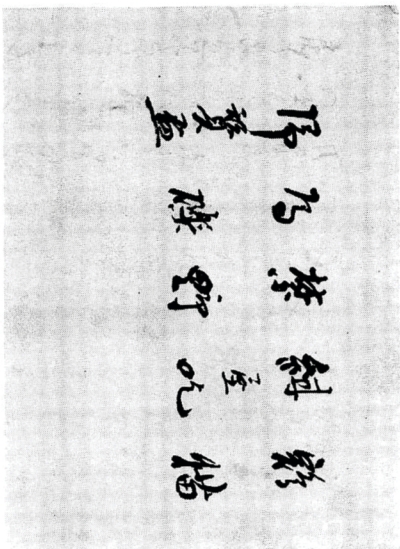
四人「いちどうにどつと、手を打わらつて、おん酒の昔と、成にけり。」三笑の謡のきり。

アド三人の名、本文に見へず。詞の内ニ一人くの名を申か。四人出る故に四国の名を付申か。シテ讃岐坊。アド三人、伊与坊・土佐坊・阿波坊。

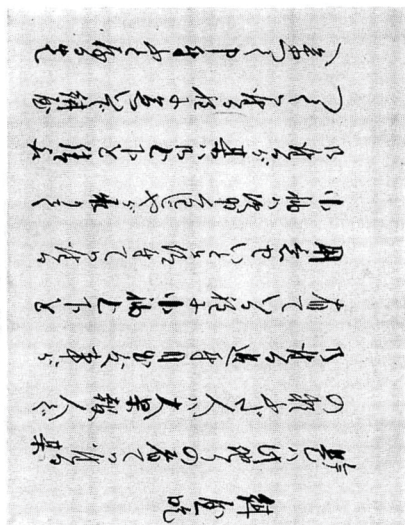
シテ 白ねり袷。衣。けさ。角頭巾。中啓。じゆず。  
アド 出立同断。シテよりハ少しづ、替りてよし。



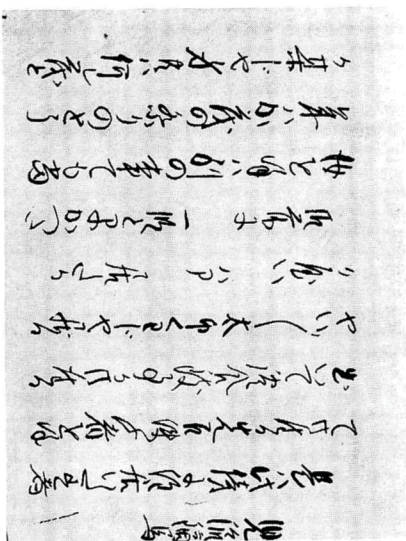
口絵 7. 「黨流狂言伝書」 狂言記・卷一 (表紙)



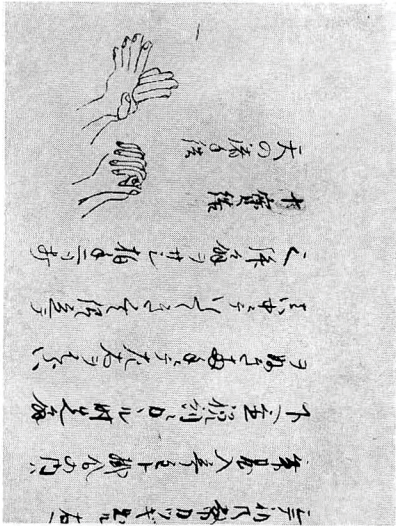
口絵 8. 狂言記・卷卅六 (目録)



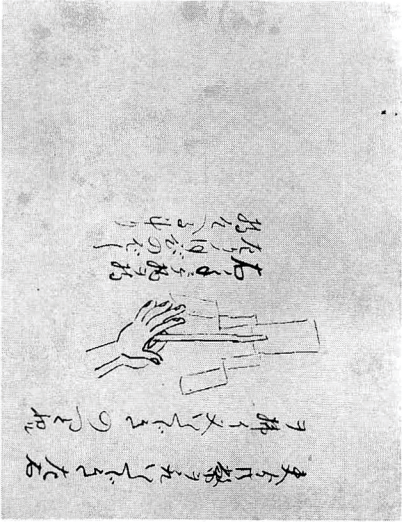
口絵 9. 狂言記 (紺屋吃)



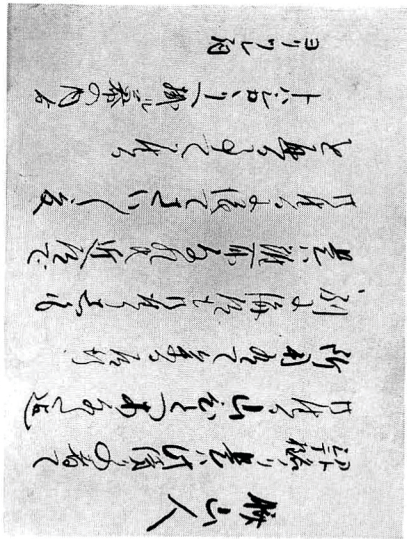
口絵 10. 狂言記 (児流鐘馬)



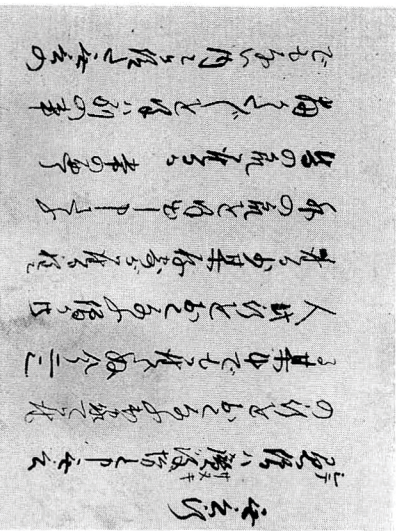
口絵11. 狂言記 (祝詞神楽)



口絵12. 同11



口絵13. 狂言記 (膳山人)



口絵14. 狂言記 (無言行)